

# アイルランド紀行

星 莖 由 尚

アイルランドを旅行してきました。アイルランドは、日本人にとってヨーロッパの中でもそれほど人気のある国ではありません。イギリスのそばにくっついた小さな島というのが大方の認識でしょう。数十年前には北アイルランドの紛争があり、覚えておられる方も多いと思います。アイルランドの紛争は、イギリスとアイルランドの長い歴史における葛藤が原因です。宗教の違いと長い間のイギリスの支配がこの国の歴史に大きな影を落としています。

アイルランドの先住民はよくわからないようですが、紀元頃にはケルト人が支配し、多くの王国を作っていたようです。ケルト人はゲール語を話し、今でもアイルランドの公用語となっています。交通標識などには、ゲール語が先に表示され、英語が併記されています。私の印象では、ゲール語と英語は全く違う言語のようで、それは文字の綴りからもわかります。

アイルランドには、5000年くらい前からの遺跡が残っています。いわゆるストーンサークルです。イギリスのソールズベリー平原のストーンヘンジが有名ですが、アイルランドにもあのように大きなものはありませんが遺跡がたくさんあるようです。日本にも東北地方などによく似たストーンサークルがあります。洋の東西を問わない石像遺跡の類似性は、古代の人間の観念の類似性を示唆してなかなか興味深いものがあります。



プーラブローネの先史時代遺跡



グレンダーロツホの初期キリスト教遺跡

各地に残っています。現在は、ホテルとして利用されているものも数多く、私も冥土の土産と思い泊ってみました。一日だけ中世の貴族の気分になりました。

アイルランドには、ローマ時代末期から中世初期の初期キリスト教の遺跡が多数あります。石造の修道院や教会が半ば崩れかけて草むす丘の上に建っているのは、古代の人々の信仰と寂寞たる時間の流れを語りかけ、異教徒にとっても心に染みいる感があります。中世から近世にかけては、イギリスの侵攻により戦国時代の様相を示していたものと思われます。海岸や丘の見晴らしのよい場所には城跡がたくさん見られます。貴族の荘園の館、Manor House とよばれていますが、

さて、私は、アイルランドの北の入り口ベルファストからほぼアイルランドの中北部を巡りました。ベルファストはイギリスです。ベルファストから反時計回りに巡りましたが、ベルファストからロンドンデリーという町までがほぼイギリスで、ロンドンデリーを出るとすぐアイルランドに入ります。国境には、検問所があるわけでもなく、アイルランドにようこそという標識があるだけで、日本でいえば県境を通過するのと変わりません。ベルファストは、イギリスのアルスター州に属していますが、アルスター州にはイギリスの部分とアイルランドの部分があります。但し国境を越えるとイギリスポンドが使えなくなり、ユーロになります。



ベルファストからロンドンデリーまで海岸を走っていくとジャイアンツ・コースウェイの奇勝を見ることができます。また、アイルランドの西海岸、アラン諸島の対岸にはモハーの断崖という 200m の切り立った断崖が続きます。アイルランドは、高い山はなく、なだらかな丘が視界いっぱい広がる全体としては穏やかな地形ですが、このような丘が海に面するところで厳しい海蝕崖が作られているところがあります。この2つの自然景観について紹介しましょう。

ジャイアンツ・コースウェイは、ナショナルトラストが管理していて、ビジターセンターで入場料を取られます。有名な六角柱の柱状節理がよく見られる所まで約 1 km の間はシャトルバスが走っています。天気もよいので歩いて行きました。

ジャイアンツ・コースウェイは、アイルランドの伝説の巨人フィン・マックールがスコットランドの巨人ベナンドナーとの戦いに行くためにコースウェイを作ったとされています。伝説はともかく、古第三紀の火山活動により玄武岩が貫入し広い溶岩台地を作り、これが冷えて固まる間に断面が六角形の典型的な柱状節理を作ったものです。最近、テレビでもよく紹介されるので見たことのある方も多いと思います。海岸の断崖には、ここかしこに見事な柱状節



ジャイアンツ・コースウェイ



ジャイアンツ・コースウェイの柱状節理

理の柱が見られ、ビジターセンターから約 1 km の所には、波蝕を受けた海蝕棚があり、六角形の断面をした柱状節理の切り口がよく見られます。柱状節理の断面を見ながらその上を歩くことができます。よくテレビなどで紹介されるのはこの場所です。大部分の人はここまでで終わりです。その先にも遊歩道が続き、さらに 1 km、断崖には、所々柱状節理の柱が見られ、その下を歩いて行きます。半分くらい行ったところに大きな柱状節理の柱が見られます。そこを過ぎてさらに行くと、崩壊等のために危険という表示があり、あとは自己責任ということになります。その先は、確かに道が崩壊しているように見え、行けないことはないが危険が伴いそうです。ここまでとして再びビジターセンターに戻りました。

柱状節理の発達した断崖は、まだまだ続き、私が見学したのは、ほんの一部でしたが、日本では見られない(兵庫県の玄武洞など小規模なものは日本にもあります)太く大きな六角形の柱状節理は、一見の価値があります。



モハーの断崖

モハーの断崖は、ジャイアンツ・コーズウェイと同じように海蝕崖をなしていますが、200mのほぼ垂直な断崖が見渡す限り続いています。ここも同じようにビジターセンターがあり、断崖を見るためには500mほど歩いていかねばなりません。ビジターセンターは、地形を利用して半地下式に建設されており、周囲の風景の中で目立たないように建てられています。断崖の上はなだらかな丘の続きで、このような厳しい断崖があるとは

上にいる限り想像できません。断崖に沿って遊歩道がついています。低い石の板で壁が作られていて、転落などの危険から守ってくれますが、石の壁の外側を歩いている人もいます。落ちたらまず命はないでしょう。モハーの断崖を形づくっているのは、約3億年前石炭紀の砂岩・頁岩の互層です。地層はやや傾いていますが、日本の古生層などのように複雑な褶曲などは見られないようです。

断崖の上は風が相当強く、私が見学したときは雨も降り、気温も低く天候は良くありませんでした。晴れていても急に雨が降ってきたり、全般に天気の変化が激しいのがこの地方の特色です。風の強さは相当なもので、傘は全く役に立ちません。断崖の上を1km近く歩きましたが、誠に荒涼とした風景でした。海岸線は弓なりになっており、小さな岬がいくつもあります。その中の一つには、オブライアの塔という円塔があり、19世紀の中頃に見学者のために作られた塔です。石造りで、中世の城の遺跡かと思えばばかりの塔です。この塔からはモハーの断崖が手に取るように見渡せました。



モハーの断崖上のオブライアの塔